

奈良県立大学建学の精神	奈良の再発見を通して日本と世界に貢献する		
教育目標	地域社会及び国際社会で活躍する人間を育てる		総合評価
学校経営方針	自立した個人として他者や社会に貢献し、何事にも挑戦する姿勢を確立する		
昨年度の成果と課題	本年度重点目標	具体目標	
<p>昨年度は、本校教育の特色である、アカデミックスキルの基礎を学びつつ生徒自身が設定した課題に取り組む「課題探究」、反転学習を前提とする「アクティブ・ラーニング型授業」の全教科での導入、一人一台の情報端末を活用した「ICT活用教育」等に積極的に取り組んだ。また、生徒には、「自立」した個人として、他者や社会に「貢献」し、何事にも「挑戦」することを求め、これを生徒綱領（自立、貢献、挑戦）として示した。第一期生の生徒の多くは、これらを理解し、積極的に取り組み、充実した学校生活を送ることができた。</p> <p>令和5年度入学選抜では、前年度より100名増の595名が受検し、188名が第二期生として入学した。今後は、本校の教育方針に適合する受検生の安定的確保を図ることが課題となる。</p>	<p>本年度は、昨年度の各具体的目標の実績を踏まえ、教職員と生徒が一体となって学校づくりを進めていくことを本校教育のねらいとして位置付け、生徒たちに対しては、「学習活動」「学校行事」「部活動・生徒会活動」等のあらゆる場面で「自立」「貢献」「挑戦」の3つのキーワードを意識し、実践することを通して、変化の激しい不確実な時代をたくましく生き抜く力を身に付けるよう指導する。具体的には、</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">1.自らの意思で主体的に行動し、責任をもつ姿勢を確立すること</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">2.他者や社会への関心をもち、課題解決のために自らの能力を発揮する姿勢を確立すること</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">3.失敗を恐れず、新たなことや困難な課題に果敢に挑戦する姿勢を確立すること</div> <p>を、引き続き自らの目標として設定させる。</p> <p>また、</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">4.「学び続ける教員」としての自覚と実践</div> <p>をキーワードに据え、教えることと並行し学ぶことの専門家であることを自覚し、実践することで、生徒に学ぶ喜びを伝えられるよう研修を充実させ、積極的に参加するよう努める。また、生徒の主体的・協働的な学びをさらに充実させ、全ての授業において反転学習を導入し、平素の授業では情報端末を効果的に使用しながら、アクティブ・ラーニングの手法を用いた授業を積極的に導入するよう努める。また、観点別評価を積極的に行う。</p> <p>次に、</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">5.本校の教育活動の様子を積極的に発信し、その魅力を広く伝えることに努める</div> <p>こととし、各重点目標に関して、右記の具体的目標を掲げる。</p> <p>なお、その成果については、各種アンケートの結果などを判断指標として使い、達成度・満足度などを把握する。</p>	<p>①昨年度発足した「生徒会」の活動を、学校行事等の計画・実施に主体的に関わるようにするなど、生徒が気力・体力・知力の充実した主体的な活動を送れるような場と機会を提供する。</p> <p>②生徒が受動から主体となるよう授業や活動等の工夫を進め、また、そのための支援体制をつくる。</p> <p>①社会的課題への関心をもち、社会の構成員（主権者）としての素養を醸成する。</p> <p>②地域との連携を強化し、「協働」を進め、地域に「貢献」することの意義を確認できるように、様々な体験活動を充実させる。</p> <p>①学校行事の意義を認識させ、主体的な参加姿勢を培うとともに、「挑戦」することの大切さを認識させ、問題解決能力を養うよう努める。</p> <p>②社会的自立を見通した進路選択を意識することで、学びに向かう意欲を醸成する。ライフキャリア教育等を充実させる。</p> <p>①教職員の研修体制を民間を活用するなど刷新し、充実した学びを構築する。</p> <p>①各種メディアを積極的に活用し、多角的に本校の魅力を多方面に周知する。</p> <p>②学校評議員会での評価を活性化する。</p>	B

	具体的目標	具体的方策・評価指標【】の番号は重点目標-具体目標に対応する	自己評価結果	成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策
(1) 学習支援	生徒が主体となって取り組める魅力ある授業づくりを推進する。	生徒が主体となる学習を推進し、授業に集中して取り組めるよう支援する。生徒の授業アンケートにおけるアクティブ・ラーニング型授業の満足度が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】	A	アンケート結果「自ら考え学ぶ学習に満足している」肯定的な回答が81.9%であり、多くの生徒が満足している。なお、「自ら考え学ぶ学習に主体的に取り組むことができる」との肯定的な回答は82.8%とほぼ同数だった。	「自ら考え学ぶ学習」への満足度は昨年度より2ポイントほど減少しており、工夫改善を進めていく必要があると考えている。ICT活用については、昨年度より2ポイント程度上昇しており、2年目となって生徒への指示や用い方の習熟が進んだものと考えられる。	ICTを活用した教育が昨年度より進んでおり、評価できる。自主的に学ぶ姿勢を身に付けさせるための工夫が必要である。
	各種教材・教具の適切な活用を図り、家庭学習を重視した主体的な学びを実現する。	学校での学習とともに、ICT教材の活用による家庭学習を重視させる。生徒の授業アンケートにおいて、ICTを活用した学習に主体的に取り組むことができた生徒が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】	A	アンケート結果「情報端末を活用した学習に主体的に取り組むことができる」との肯定的な回答は90.1%であった。		
(2) 進路支援 キャリア教育	①生徒の進路第一希望の実現のために、自学自習の習慣を身に付けさせる。	早期、放課後の自習室環境を整備する。また、学年別に学習研修会を定期的に行い、教科との連携をはかる。学習教材を有効に利用し、学習記録等、進路実現を見据えた学習計画を立て、自学自習の習慣を身に付けさせる。生徒アンケートで、自学自習の習慣が身に付いたが70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【3-②】	B	アンケート結果「自学自習の習慣が身に付いた」1年50%、2年70%。年間を通して、強化学習会・実力養成講座等を設定していたが、特に第1学年は、新着任の先生方も多く、本校の進路に対する方向性、取り組みを上手く伝えきれていなかったこともあり、実力養成講座、県大塾の利用等が消極的であった。	・来年度は、3学年が揃うこともあり、本校の進路指導の方向性を教職員全体で共有し、生徒の進路実現のための学力向上を目指したい。 ・県大塾に新しい機会があることもあり、自習環境を充実させ、県大塾の利用状況を向上させたい。	自主的に学習できる環境が整備されていることは評価できる。自己の将来を考え、その上で学習習慣を身に付けさせるような生徒への働きかけが必要である。
	②ライフキャリア教育を促進する。	自己実現のためホームルーム、ライフキャリア育成プログラム、各授業等を通して、自己の将来について考えさせる。学年末の生徒アンケートでキャリア教育・進路情報の満足度が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【2-①】【3-②】	A	アンケート結果「キャリア教育・進路情報の満足度」1年67%、2年74%。インターシップ、大学教員による出前授業(1年)、キャリアデザイン授業(2年)での講演等、自己の将来について考えさせる多くの機会を設定できた。	・今年度に行ったインターンシップ・進路講演等を精査し、来年度もキャリア教育を充実させたい。	
(3) 生徒支援 生徒会活動	基本的生活習慣の確立と規範意識の向上を図り、自律的な学校生活を旨とする。	さまざまな場面で、「今は何の時間か。自分は何をすべきか。」を考えさせ、主体的・自律的に行動できる生徒を育てる。時間の意識・他者を気遣った言葉づかい・交通ルールや交通ルールの指導を徹底する。生徒アンケートで「自律的な判断を意識している」「他者との協調を意識している」と回答する生徒が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【2-①】	A	生徒アンケートの「時間や身だしなみについて、自律的に判断して行動している」の項目に、「そう思う」「だいたいそう思う」を合わせると94.3%の回答があった。生徒心得等で画一的に判断するわけではなく、頭髮や服装については、生活委員会から「清楚」という目指すイメージの共有が図られ、生徒自身の主体的な提案と自律的な判断がなされている。他方で、遅刻・欠席の多い生徒に個別の事情に配慮して寄り添うことが教員の中で組織的に行われている。	・生徒アンケートの「そう思う」の数値が下がっているが、日常的な生徒との関わり合いから自律的な意識の芽生えを感じる場面が増えてきている。強い一時的な指導ではなく穏やかながらも継続的な指導をしている。 ・遅刻の数や頭髮服装の状況を契機にした声掛けをいっそう増やし、生徒個別の事情に即した対話的な生徒指導を行う。 ・各委員会が購買や学校行事等の検討を進め充実させていく。	生徒の自主性を大切に自律的な行動を意識するよう取り組ませていることは評価できる。遅刻生徒の対応や、生徒会活動の一層の充実に向けて、さらなる取組が求められる。
	生徒会活動の活性化を図り、部活動や学校行事へ主体的に参加させる。	生徒会が中心となり、生徒が積極的に関わり部活動や学校行事に参加できる取組の企画を促す。学年末の生徒アンケートで、学校行事の満足度が70%以上でA、50%以下でC。【1-①】 【2-②】 【3-①】	A	生徒アンケートの「本校の学校行事や生徒会活動は充実している」の回答が「とてもそう思う」「そう思う」を合わせて71.6%であった。生徒会が主体となり、目安箱の設置や専門委員会の活性化等を進めることができた。専門委員会の役割分担をより明確にしていることが課題である。		
(4) 人権教育 特別支援 教育相談	①生徒一人ひとりが自分の人権を守り、他者の人権を守ろうとする意識を高め、人権を尊重する主体的な態度を育てる。	生徒一人ひとりの人権意識を高めるため、「人権だより」の発行を行う(年3回)。いじめを生まない、ゆるささない環境作りを積極的に行える生徒を育てるため、生徒によるいじめ防止活動を行う。人権教育HRで生徒の身近なテーマを取り上げ、人権尊重の意識を育てる。生徒アンケートで「人権意識が高まった」「自分・他者の人権を大切にしようと思う」と回答する生徒が70パーセント以上でA、50%以下でC。【1-②】	A	人権だよりの発行を年2回行った。人権委員が主体となってポスターを毎月掲示し、思いやりをもった言動・行動を呼びかけた。人権教育HRでは、1学年は互いの思い考えを認め合う学習、2学年は身近な人権問題について学習し、人権意識を高めることができた。生徒アンケートで「自分・他者の人権を大切にしよう」と発言・行動しなければいけないと思う項目の回答が「とてもそう思う・そう思う」と合わせて97%であった。職員研修を6月に実施した。	・人権委員の啓発活動をさらに発展させていく。 ・人権HRの回数を増やし充実させる。 ・スクリーニング会議を適宜行う。 ・関係職員やスクールカウンセラー、必要に応じて外部機関と緊密な連携をとる。	教育相談や特別支援教育に関する体制を整え手厚い支援ができたことは評価できる。引き続き、生徒の状況把握に努めることや生徒が主体となる人権教育の推進を図ることが必要である。
	②教育相談や特別支援教育の体系化を図り、学校全体の共通認識のもとに個々に応じた対応を行う。	配慮を要する生徒を把握し、教職員共通理解の下に対応する。また、特別支援が必要な生徒については、特別支援教育委員会を開き、支援体制を整える。支援の必要性に応じてスクールカウンセラーや外部機関と連携する。職員研修を開き、情報を全教職員に共有する機会を3回以上持つことができればA、2回でB、1回以下でC。【4-①】	B	スクールカウンセラーや外部機関と連携し、必要な支援内容、生徒の実態、状況把握に努め、情報を関係職員で共有した。体制は支援の必要性に応じて外部機関との協力体制を整え、校内ではケース会議で支援の方向性を検討し整えた。職員研修は4月と10月に実施した。		
(5) 文化図書 教育	読書の習慣を身に付け、豊かな感性と幅広い教養を育む。	読書の楽しさや意義を実感し、生涯にわたって図書館や読書を自分の人生に生かすことのできる態度を育成する。年度末アンケートで学校図書館と読書についての満足度が70%以上でA、50%以下でC。【2-①】	A	アンケート結果「学校図書館や図書館を使った活動について満足している」肯定的な回答は72.9%であり、基準は越えているものも高いとは言えない。なお、「図書館の使い方や読書についての指導がためになったと感じる」については肯定73.9%だった。	新しい教員と協力して、図書委員会を活性化させ文化行事を更に充実させることができた。一方で、図書館の利用者や貸出が伸び悩んでいたりと、授業での活用については、まだ工夫の余地があることを課題と考えている。	引き続き探究活動を中心とする教育活動に沿った体制づくりを進め、図書館の活用を推進する取組が必要である。
	文化活動を充実し、生徒の想像力・創造力の育成を目指す。	文化行事をとおして想像力・創造力を育て、社会の一員として必要な文化的素養や教養を育成する。学校全体の取組として、年間4回以上の文化的行事を実施してA、2回以下でC。【2-②、3-①】	A	昨年度実施の「創立記念行事(県大見学会)」「学校図書館オリエンテーション」「新春かるた大会」に加えて、今年初めて生徒とともに企画した「図書館カフェ」を開催し、計4回の文化行事を実施した。		
(6) 環境整備	生徒が自ら校内を美化する姿勢を養う。	日々の校内清掃活動をおとして、公共物を大切に、過ごしよい環境をつくる意識を高める。学年末の生徒アンケート(校内美化)で、校内を美化する意識が身に付いたが70%以上でA、50%以下でC。【1-①】	A	生徒アンケートの「日々の校内清掃を通して、校内を清掃する意識が身に付いた」の回答が「とてもそう思う」「そう思う」を合わせて79.6%であった。 校門前の花壇を充実させる美化活動にも取り組むことができた。	・引き続き教員と連携を取り活性化をはかる。 ・来年度、3学年が揃うことを踏まえて、清掃箇所の割り振りの再点検を行う。	3学年が揃う来年度を想定し、教室等の施設、設備の活用を考える必要がある。また、一層の校内美化に取り組む必要がある。
	大掃除等を行い、校内美化を図る。	環境委員会を中心とした活動を活性化させ、校内大掃除活動を定期的に行う。大掃除活動を年間8回以上でA、5回以下でC。【1-①】 【2-②】	A	大掃除活動を年間10回行った。清掃用具の点検と補充を行い清掃活動を充実させた。清掃等の行事前に委員会を開催したことにより、生徒たちの校内美化に対する意識が高くなったと感じる。		
(7) 健康安全 食育・防災 教育	①生徒が学校生活に専念できるような健康な生活を送るための生活習慣を確立する。	各種面談、健康調査票や学校保健委員会、定期検診やその事前・事後指導を通して生徒の身体状況、健康状態の共通理解を図る。保健だより、食育だよりをそれぞれ年3回以上発行した場合A、1回以下でC。【1-②】	A	保健だより9回、食育だより3回発行した。検診などの生徒への事前・事後指導を行い、職員の共通理解を図った。保健室との連携を密にするとともに、日常生活における生徒の状況を理解していく必要がある。	・保健委員会を中心に活動の活性化を図る。 ・今年度は火災発生時の避難と災害発生時のスマホの課題を扱ったが、広く災害の場面を想定し計画を提案する。 ・安全点検日を行事予定に記し、安全点検の回数を確保する。	心身の健康の保持増進の観点から、食育・学校保健について、関係機関と連携して取り組む必要がある。防災教育に関してはより一層充実した取組が求められる。
	②火災、震災等に備える取り組みを通して、自らの身を守る行動の習得と防災に対する意識を高める。	火災、震災に備えて、避難訓練およびシェイクアウト訓練を実施する。安全点検を日常的に行うことにより、危険箇所や潜在危険を早期に発見し、事故災害の可能性を除去する。安全点検を年間6回以上行った場合A、2回以下でC。【2-①】	C	避難する行動訓練、シェイクアウト訓練に加え、情報防災に関する学習も行った。ICT活用教育の一環として本校らしい防災教育を進めることができた。今年度は1回にとどまったが、校舎内外の安全点検を実施し、教員指摘の箇所の修繕を行った。		

	具体的目標	具体的方策・評価指標【】の番号は重点目標-具体的目標に対応する	自己評価結果	成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策
(8) 広報	① 中学校・塾等への広報活動を積極的に 行う。	生徒主体で本校を紹介するリーフレットを作成し、説明会、県内の施設等で配付する。また、学校説明会を生徒に主体的に運営させる。学校および各施設での説明会実施回数が15回以上でA、5回以下でC。【1-②】【5-①】	A	本校及び要請に応じて中学校や塾の説明会等に参加し、生徒、保護者等に説明を行った(16回)。ただし、本校が主体となつての中学校教員対象の説明会等は今年度は実施しなかった。	次年度以降、入学者選抜の方法や方針等に変更が入ることも想定し、本校主体で、塾や中学校教員等を対象とした説明会を実施していくことが考えられる。夏期の学校体験会については、暑い時期でありそのことへの意見が大きいため、また、教員への負担も大きい一方で、参加者の満足度は高いので、時期を検討するなどして継続的に開催していくことが望ましいと考えられる。	生徒が主体となる学校広報活動は、たいへんめずらしく、今後も引き続き精力的に取り組む必要がある。在校生の保護者に実施したアンケートについても多分析し活用すべきである。
	② 学校体験会を実施し、特徴的な本校教育を中学生・保護者に知ってもらう。	夏期休業中に学校体験会を行う。できるだけ多くの教科の体験を提供し、本校への入学希望者を増やす。参加者へのアンケートで、体験会に満足したと答えた割合が全体の80%以上でA、60%以下でC。【5-①】【5-②】	A	学校体験会への参加者、生徒保護者合わせて計500名から回答を得たアンケートの結果「本日の体験会についての感想」を4段階(4が最高)で行い、3又は4と回答したものが全体の96.6%だった。		
(9) 学校運営	① 「学び続ける教員」としての自覚と実践を促すための研修を推進する。	教職員が教育研究所等の研修会や教科等の研究会に積極的に参加し、その研修の成果を教職員間で共有できる状況をつくる。校内外の研修会への参加者の割合が70%以上でA、50%以下でC。【4-①】	A	全教科・科目において、教育課程研究会や学習指導研究会に参加した。教員数が増加し昨年度より教員間で意見交換するなど研修内容を深められるようになった。	教科によっては担当教員が少ない場合は他教科の授業見学をするなどして研修できる機会を増やした。また、研修で得られた成果をもっと共有できるようにした。	本校の探究を中心とした学びが認知され一定の志願者数を確保できたと思われ、評価指標の「志願者数」は見直す必要がある。
	② 受検者数を増加させ、本校の教育方針に適合する生徒の安定的確保を図る。	教職員が働きやすい環境を提供し、本校を誇りに思えるような学校運営を行う。その上で、全教職員が一致団結し、受検者増に努める。前年度の受検者数より増加していればA、減少でC。【5-①】	C	令和5年度入学者選抜は、推薦10名、一般616名の計626名の出願、実受検者数は推薦10名、一般585名の計595名であった。令和6年度は、推薦4名、一般388名の計392名の出願、実受検者数は推薦4名、一般361名の計365名であり、昨年度より減少した。		
(10) 研究開発	探究的な学習をとおして社会の課題に関心をもたせる教育課程を編成する。	探究的な学習を核とした教育課程を編成し、その円滑な実施に向けて立案とサポートを行う。課題探究の学習に対する生徒の満足度が70%以上でA、50%以下でC。【2-①】	A	課題探究の学習に対する生徒アンケート全体の結果、肯定的な回答は85.5%であった。一方で、「課題探究Ⅰ」については研修の不足、「課題探究Ⅱ」については研修の不足と全体計画の修正点なども指摘されている。	前年度の結果を踏まえて、更に改善の余地がある課題がいくつか見えており、まず教職員への理解を進めることが課題であると考えている。	探究的な学びがさらに進むよう、全教員で連携を密にする必要がある。
(11) 1学年	自ら課題を設定し解決しようとする探究活動を通して、自律及び自立の姿勢を身につけることを目指す。	日々の学校生活を通して、自らの夢の具現化を目標とし、それに向かって自らの意思で行動できるようにサポートする。生徒に対する学校生活に関するアンケートにおいて、満足度が70%以上でA、50%以下でC。【1-①】【2-②】【3-①】	A	生徒たちの学校生活に対する満足度は高い(87.5%)。ただ、その一方で、目標と掲げているような面での成長が見取れなかったかという、必ずしもそうではない。与えられた課題に対しては意欲的に取り組むことはできるが、自ら課題を設定して、自身で自身の成長を促すような行動を取るまでには至らない生徒も多い。それが自律的な行動を十分に取れないことにも繋がっている。また、進路目標の実現に向けて積極的に取り組んでいる生徒とそうでない生徒との二極化が進んでいることも課題である。	コロナ禍で様々な制限をかけられた学校生活を送ってきた影響か、自分で考えて行動するということに消極的な生徒が多いように思う。生徒の自主性に任せる部分と、教員がサポートする必要がある部分の見極めをし、生徒の発達段階に応じた適切な指導を心がける。	多様な生徒を理解し、主体的に取り組む意欲を引き出せるよう今後もきめ細やかな対応が求められる。
(12) 2学年	1期生として中間学年としてアントレプレナーシップ(起業家精神)をどのような方法で、育成するか議題化し考え具体化することを目指す。	各個人高校生活の充実をはかり、目標に向かい自らの意思で主体的に行動し、1期生として後輩に範を示す姿勢を確立する。生徒に対する学校生活に関するアンケートにおいて、満足度が70%以上でA、50%以下でC。【1-①】【2-②】【3-①】	A	生徒に対する学校生活に関するアンケートの学年平均値は82.4%となり、概ね満足度は高い。1年生から上がったものとして注目すべき項目としては、時間や身だしなみについて自律的に判断して行動している(93.8%)や自分・他者の人権を大切にしようと言発・行動しなければいけないと思う(99.4%)がある。9割を超えるところから2年生になって社会性や協調性を身につけていることがうかがえる。自学自習習慣もポイントとしては上がり、高校生の発達段階を概ね満足感をもって進んでいる。	協調性の高い学年集団だからこそ、進路実現に向け、個々孤立してしまわず、安心安定した学びの場を提供できるようキャリア部と学年が協同してサポートしていきたい。	引き続き多様な生徒に對し一人一人に於いてきめ細やかな対応し、進路実現に向けた取組を進める必要がある。
国語	より良い評価方法(観点別学習状況評価)の確立	観点別学習状況評価について研究・実践し、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かい指導を目指す。生徒の授業アンケートでの観点別学習状況評価に関する理解度が70%以上でA、50%以下でC。【4-①】	A	評価基準を明確にし、適切に評価を行った。また、理解度に応じて課外講座等を実施し、生徒のニーズに合わせた指導を行うことができた。加えて、小テストやペアワーク、グループワークを取り入れ、理解の深化につなげることができた。授業アンケートでの観点別学習状況評価に関する理解度は90%以上であった。	新課程で望まれる実学的な論理思考と、一方で目指すべき主体的、対話的で深い学びの両立を図るための授業実践を検討したい。	ペアワーク、グループワーク等を取り入れ内容理解に繋げていることは評価できている。引き続きICT機器を活用した高度な国語教育の実践に努める必要がある。
	言語感覚を磨き、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を育成する。	探究学習等に必要、基礎的な国語の知識・技能とともに、国語を用いて思考し判断し表現する力を身に付け、ICT教材等を活用してこれらを活用させる授業を実践する。生徒の授業アンケートでの授業方法に関する満足度が70%以上でA、50%以下でC。【2-①】	A	論理的思考力の向上を目指し、多様なテーマの文章を取り上げて授業実践を行うことができた。探究活動との接続も意識させ、生徒の興味、関心を広げ、深めたい内容となった結果、授業方法に関する満足度は90%以上になっている。		
地歴	より良い評価方法(観点別学習状況評価)の確立	観点別学習状況評価について研究・実践し、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かい指導を目指す。生徒の授業アンケートでの観点別学習状況評価に関する理解度が70%以上でA、50%以下でC。【4-①】	A	導入科目である「地理総合」「歴史総合」では観点別学習状況をみても達成感、満足度は高い(90%)。一方「世界史/日本史/地理探究」は興味関心度合いによって上下幅があるので、下位の生徒への丁寧なアプローチが必要である。	来年度は新課程入試に対応することを念頭に、知識だけでなく、思考力を身につけさせる授業展開を模索する。	討議等を取り入れ、生徒自らが考える授業にしていることは評価できる。今後も授業評価を高める工夫を一層進めることが求められる。
	地理的・歴史的な見方・考え方を身につけて課題を追求する活動を通して、広い視野に立ち国際社会に主体的に生きる資質・能力を育成する。	基本的な地理的・歴史的知識を身につけた上で、事象を分析、理解する学習活動を行う。高大連携を見据えた実践的な取り組みを行い、視野を広げ探究的な観察力を身につける授業を実践する。生徒の授業アンケートでの授業方法に関する満足度が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【2-①】	A	授業アンケートでの結果は達成できた(91%)。2年生探究科目は、時間の限られた中、プリント作業や課題、討議等を行って、2年生で終了すべき範囲を達成することができた。		
公民	より良い評価方法(観点別学習状況評価)の確立	観点別学習状況評価について研究・実践し、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かい指導を目指す。生徒の授業アンケートでの観点別学習状況評価に関する理解度が70%以上でA、50%以下でC。【4-①】	A	授業アンケートでの結果は達成できた(88%)。特に「自分の考えの論理的に述べる」という作業を授業の様々な部分で実践してきたことがテストや普段の授業の理解につながったと感じている。	今年度は前年度の様に大きなグループワークをするのではなく、授業毎に細かくグループで考える時間を作るようにした。結果として、生徒に論理的思考の実践はできたと思うが、やはり大きなイベントがない分、盛り上がりにも欠けていた感はある。やはり来年度はディベートなどのグループワークの実践を検討したい。	授業において、グループワークなど様々な工夫がなされていることは評価できる。次年度も自分の考えを発信し実社会と繋がる授業展開が求められる。
	主権者としての知識や心構えを理解し、答えのない課題に対し、最適解を提示できる論理的思考力を育成する。	基本的な社会の諸制度や課題、文化、歴史などを理解し、社会の諸問題に対し、様々な角度から考察を行い、それらの課題に対する最適解を論理的に導きだせるよう、探究的な活動を伴う授業を展開する。生徒の授業アンケートでの授業方法に関する満足度が70%以上でA、50%以下でC。【2-①】	A	アンケート結果では目標を達成できた(80%)。4月より公民科は多角的に物事を見るということを実践すると生徒に言い続けられており、それに合わせて細かくグループワークを行うことで最適解を見つけていることが生徒間でも違和感なくできるようになったと感じている。		
数学	より良い評価方法(観点別学習状況評価)の確立	観点別学習状況評価について研究・実践し、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かい指導を目指す。生徒の授業アンケートでの観点別学習状況評価に関する理解度が70%以上でA、50%以下でC。【4-①】	A	小まめに単元テストを実施し、生徒の理解度の向上を行った。また、全クラスで実施した共通プリントについては、どの観点の評価にもいれるか明確にし、クラス間でのずれもないように行った。授業アンケートでの観点別学習状況評価は「とてもそう思う」「そう思う」を合わせて88%であった。	テスト後に理解が不十分であった生徒への対応をより丁寧に行う必要がある。また、テスト作問では難易度のバランスを考え、生徒自身が理解度を分かるようにし、復習につなげ基礎学力向上を目指す。また、2年次以降からはそれぞれの進路にあった授業内容や放課後の取り組みを進める。科目数が増加するが、定期的担当教員で打合せを行い、生徒たちの興味関心につながる教材の工夫を分担、連携して行っていく。	生徒自身が理解度を認識できる評価が行われていることは評価できる。数学を苦手としている生徒に対する適切なケアを行うことが求められる。
	数学的な見方や考え方を認識し、数学の美しさ・おもしろさを感じられる生徒を育成する。	身の回りの現象を数学的に捉えた題材を取り入れるなど、興味・関心をもたせる授業を行う。また、ICT機器を活用して、それらの現象を体験し、協働で問題解決を行う課題探究型の授業を実践する。生徒の授業アンケートでの授業方法に関する満足度が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【2-②】	A	DSの授業を中心に身の回りの現象と関連した題材で課題学習を行った。生徒の興味関心につなぐべく、数学的思考を深めるには教材の工夫がさらに必要に感じる。グループワークについては、多くの生徒たちが各班で協力し、代表者の発表や解説等も効果の得られるものとなった。授業アンケートでの授業方法に関する満足度は「とてもそう思う」「そう思う」を合わせて86%であった。		

	具体的目標	具体的方策・評価指標【】の番号は重点目標-具体目標に対応する	自己評価結果	成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策
物理	より良い評価方法(観点別学習状況評価)の確立	観点別学習状況評価について研究・実践し、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かい指導を目指す。生徒の授業アンケートでの観点別学習状況評価に関する理解度が70%以上でA、50%以下でC。【4-①】	A	プリントを用いて公式や解法について生徒に明確に解説をした。また、電子黒板を用いて問題演習を行い、単元ごとにテストを実施した。生徒アンケートの理解度は89%であった。	実験を多く取り入れ、生徒に興味・関心を持たせる工夫をする。また、実力養成講座を利用して進路実現のために生徒の理解を深めさせ、個々に応じた指導を行う。	苦手な生徒にも理解しやすいう工夫がなされている。物理に興味をもつ生徒が探究に学ぶ取組が必要である。
	物理現象に対する思考力を育成する。	身の回りの物理現象を理解し、興味・関心を引き出す授業を行う。ICT機器を活用して、協働で問題解決を行う指導を目指す。生徒の授業アンケートでの授業方法に関する満足度が70%以上でA、50%以下でC【1-②】【2-②】	A	実験を通して、身の回りの物理現象に対して興味を持たせる工夫を行った。生徒の授業アンケートでは「とてもそう思う」「そう思う」合わせて79%であった。		
化学	より良い評価方法(観点別学習状況評価)の確立	観点別学習状況評価について研究・実践し、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かい指導を目指す。生徒の授業アンケートでの観点別学習状況評価に関する理解度が70%以上でA、50%以下でC。【4-①】	A	スタサブ課題、小テスト、単元テスト、課題提出等をこまめにを行い、生徒一人一人の取り組みに対して、細かく指導を行った。生徒の授業アンケートで理解度は76%であった。	生徒の進路実現のため、実力養成講座等を利用して、授業進捗をできるだけ進める。	化学が苦手な生徒に対し補習等で補っていることは評価できる。次年度は、化学が得意な生徒の学力を一層伸ばさせる対応が求められる。
	生活に関連する化学的知識を基に科学的に思考できる能力を育成する	身の回りの現象を化学的に捉えた題材を取り入れる、実験を通して、興味・関心をもたせる授業を行う。ICT機器を活用して、それらの現象を体験し、協働で問題解決を行う課題探究型の授業を実践する。生徒の授業アンケートでの授業方法に関する満足度が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【2-②】	A	多くの実験を通して、化学現象に興味・関心をもたせる授業を行った。ICTを活用し、化学反応、現象の理解に努めた。生徒の授業アンケートで興味・関心がもたれたという回答が「とてもそう思う」「そう思う」合わせて84%であった。	化学現象に興味関心を持たせる。学力層に幅があることから、生徒一人一人に応じた指導を行う。	
生物	より良い評価方法(観点別学習状況評価)の確立	観点別学習状況評価について研究・実践し、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かい指導を目指す。生徒の授業アンケートでの観点別学習状況評価に関する理解度が70%以上でA、50%以下でC。【4-①】	A	テストや成果物と各観点のつながりを今まで以上に明確にして定期的に生徒に伝えるようにした。コメントシートを活用して、生徒一人一人の取り組みに対してきめ細かい指導を行った。授業アンケートでの観点別学習状況評価に関する理解度は「とてもそう思う」「そう思う」合わせて85%であった。	授業方法は、アンケート結果を踏まえて、生徒が意欲的に取り組めた形式は継続しつつ、さらなる改善に努める。 ・生物(科学)への興味関心を向上させることが課題であるため、実験・観察を取り入れた授業研究を進める。 ・放課後の講座をさらに充実させることで、生徒一人一人に応じた指導を行う。	ICTを活用したグループワークに取り組みなど授業方法を工夫しており、興味・関心をもたせ、かつ学力を身につけさせている。今後は評価に関する研究が求められる。
	科学的思考力・表現力を育成する	観察実験を通して、興味・関心を引き出す授業を行う。ICT機器を活用し、協働で問題解決を行う課題探究型の授業を実践する。生徒の授業アンケートでの授業方法に関する満足度が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【2-②】	A	電子黒板を用いた講義とグループワーク複合した形式でほぼ全ての授業を行った。各単元で生徒タブレットを活用したテーマ別グループワークを1回以上、課題探究型の全体発表を年間10回以上実施した。授業アンケートでの授業方法に関する満足度は「とてもそう思う」「そう思う」合わせて90%以上であった。		
英語	より良い評価方法(観点別学習状況評価)の確立	観点別学習状況評価について研究・実践し、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かい指導を目指す。生徒の授業アンケートでの観点別学習状況評価に関する理解度が70%以上でA、50%以下でC。【4-①】	A	教科書だけでなく、各種模試対策や検定対策に至るまで、授業の中で幅広い指導を行うとともに、スタディサプリやオンライン英会話を活用して個に応じた丁寧な指導を心がけた。補習や講習も頻繁に全教員が協力して実施し、できる限りのフォローを行った。査定点や提出物については、どの観点の評価になるかを明確にして、各クラスで評価方法のずれがないようにした。授業アンケートでの観点別学習状況評価に関する結果は「とてもそう思う」「そう思う」を合わせて92.8%であった。	引き続きオンライン教材等を活用して、個に応じた指導改善に努める。 ・英語力だけでなく、英語を使用したコミュニケーション力の向上にも努める。 ・英語という言語の学習のみならず、幅広い知識を獲得できるように心がける。 ・年度以降も良いところは継続し、新たな考えも取り入れつつ改善に努めている。 ・業務の分担や引継ぎ等に気を付ける。	オンライン英会話では英語の運用能力だけでなく情報発信できる態度も育成できている。また、平素の授業だけでなく、検定への対策を行っていることは評価できる。様々な対策と授業の工夫が見られ、これらを継続して実施することが求められる。
	国際的な視野をもって探究活動へ応用できるようにする。相手の伝えたいことを的確に理解し、自分の思いを適切に伝える英語運用能力を育成する	英語という特性を活用して、社会問題や時事問題等、様々な分野の題材を取り入れる。言語使用を通して、興味・関心をもたせる授業を行う。ICT機器を活用して、それらの現象を体験し、協働で問題解決を行う課題探究型の授業を実践する。生徒の授業アンケートでの授業方法に関する満足度が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【2-②】	A	後期からオンライン英会話を5回実施して、英語力とコミュニケーション力の向上に努めた。また、ベアワークやグループワーク等の活動やプレゼンテーションを実施することで、生徒同士の協働の場を提供して、相互の能力向上を期待した。英語のニュースサイトを多用して、英語力の向上だけではなく、様々な知識を得られるように紹介し続けた。授業アンケートでの授業方法に関する結果は「とてもそう思う」「そう思う」を合わせて88.8%であった。		
家庭	より良い評価方法(観点別学習状況評価)の確立	観点別学習状況評価について研究・実践し、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かい指導を目指す。生徒の授業アンケートでの観点別学習状況評価に関する理解度が70%以上でA、50%以下でC。【4-①】	A	講義では、単元テスト、レポート、発表状況、実習では各自チェックシートを作成し、それぞれの工程において理解度・完成度が明確に理解できるように実践した。生徒の授業アンケートで理解度は88%であった。	実習においては大変意欲的で自主的な態度が見られるが、講義になると意欲的に取り組めていないので、興味・関心をもてる内容を目指し、改善を行う。	生活の中にある課題についてよく考えさせている。講義形式の授業改善と評価についての研究が求められる。
	家庭や地域社会における生活の中から課題を見つけ、生涯を見通して生活の課題を解決する力を育成する。	家庭や社会における生活の中にある課題に気づかせ、解決にむけての学習活動を実践する。生徒の授業アンケートでの授業方法に関する満足度が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【2-②】	A	グループワークなどを通して、生活の中にある課題について考えさせた。実習等理解を深め、興味・関心ももてるようオリジナル動画を作成し実践した。生徒の授業アンケートで興味・関心がもたれたという回答が「とてもそう思う」「そう思う」合わせて83%であった。		
保健体育	より良い評価方法(観点別学習状況評価)の確立	観点別学習状況評価について研究・実践し、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かい指導を目指す。生徒の授業アンケートでの観点別学習状況評価に関する理解度が70%以上でA、50%以下でC。【4-①】	A	教科書の内容だけでなく、保健体育の分野で、生徒たちの実生活に活かせる内容を用いながら、レポート課題、実技課題の作成を実施した。各クラス間での内容を工夫しながら、目的を明確にした。授業アンケートによる観点別学習状況に関する理解度は90%であった。	3年間を通しての授業展開を踏まえ、つながりある授業展開を目指す。改善を行う。 ・保健体育の内容だけでなく、他教科との関連を考慮するなど、生徒の興味関心を持つ授業を展開したい。	保健及び体育の授業においてICT機器を活用し、生徒の授業方法に関する満足度は高い。今後は評価に関するさらなる研究が求められる。
	生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを継続するための資質・能力を育成する。	体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的、計画的な解決に向けた学習過程を通して、ICT機器の活用や、課題探求型の授業を実践する。生徒の授業アンケートでの授業方法に関する満足度が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【2-②】	A	ICTの活用や課題探究型の授業の観点から、自ら目標を定め、課題解決をし、主体的に取り組めるような授業展開を行った。授業アンケートにおける授業方法に関する満足度は82%であった。		
情報	より良い評価方法(観点別学習状況評価)の確立	観点別学習状況評価について研究・実践し、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かい指導を目指す。生徒の授業アンケートでの観点別学習状況評価に関する理解度が70%以上でA、50%以下でC。【4-①】	A	プログラミングの授業ではteamsでの授業振り回りアンケートと成果物を評価につなげた。プログラミング以外の授業ではlife is techレッスン、理解度チェックワーク、小テストの結果を用いて評価した。授業アンケートによる観点別学習状況に関する理解度は91.0%であった。	1年生では、教科書の内容の授業時間が少し足りないと感じたので、来年度は教科書第1章の部分と、プログラミングの授業を1時間ずつ減らし、教科書第2章の授業に割く時間を増やしたい。2年生のプログラミングの授業ではlife is techレッスン以外の教材を使用するなどして、生徒が興味関心を持つ授業を展開したい。	新課程の特徴的な科目である情報に対して、生徒が主体的に取り組組み、満足度も非常に高い。Pythonでさらに実践的なプログラミングができるようきめ細かい指導が求められる。
	現代社会における情報の重要性を理解し、プログラミング等の情報技術を問題解決につなげる思考力を育成する。	ICT機器を積極的に活用し、興味関心を持たせる授業を展開する。複数のプログラミング教材を協同で用い、トライ&エラーを繰り返してプログラミングを活用しての問題解決を学ぶ授業を実践する。生徒の授業アンケートでの授業方法に関する満足度が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【2-①】	A	プログラミング学習として1年生ではscratchとmicroBit、2年生ではlife is tech lessonを利用してプログラミング言語であるpythonの授業を行った。適宜丁寧な解説をしながら、生徒たちが主体的に取り組めるように授業を展開した。授業アンケートによる授業方法に関する満足度は91.3%であった。		
課題探究	探究科の中核となる「課題探究」の全体像を踏まえた授業の実現	生徒が自らの在り方生き方を考えながら、主体的に課題設定する力を育成するための授業を計画・実施し、生徒の学びを支える。課題探究に関する資料を年間10回以上提供してA、提供が5以下の場合はC。【1-②】	B	各学年で、ポイントとなる時期、成績を付ける時期に必要な情報共有は行ったが、両学年合わせて10回は超えていたが20回には満たず、そのタイミングや内容について指導担当者から充分ではないとの声があった。	課題探究に関する情報共有、研修の在り方は、更に改善が必要だと考えている。また、生徒の大会等への参加についても、適切な紹介を進めて参加を促していく必要があると考えている。	課題探究は本校の最も特徴的なものであり、引き続き生徒が主体となって探究活動できるよう大学教員も含め全教職員で情報共有し取り組む必要がある。
	各教科や課外での学習成果を踏まえた幅広い視野をもち、実社会や実生活における複雑な文脈の中に存在する課題を発見し、それを解決に導く力を育成する。	学校外での活動、研修、大会への参加や、ICTを活用した探究への取組を積極的に実践する。生徒の授業アンケートでの課題探究の授業内容に関する満足度が70%以上でA、50%以下でC。【2-①】	A	課題探究に関するアンケートで、授業内容については肯定的な回答が81.9%であった。研修や大会参加については、今年度はビジネスプランランプりは、研修を実施したが参加者がなかった。一方TED×イベントを主催する団体の協力で、新たにプレゼンテーション講習会を開催した。		